

読む人間

映画文学人生論

大江健三郎 (1935-5)

『読む人間』(2007) 「集英社」

『奇妙な仕事』(1957) 「東京大学新聞」

『万延元年のフットボール』(1967) 「講談社」

『懐かしい年への手紙』(1887) 「講談社」

ぢやあ、よろしい。僕は地獄へ行こう

『読む人間』によれば、大江健三郎の人生を支えたのは本だ。本を読むことによって自分の人生を作り、書くことによって文学者としての生涯を全うしようとしているという。

世の中に読書家と呼ばれる人は多いが、外国文学の読書にかぎっていえば、大江健三郎に匹敵する日本人の読書家はめったにいないと思う。

小学生の頃から大学一年生までに出会って人生を支えられたのは次の四冊。

トウエイン 『ハックルベリー・フィンの冒険』

渡辺一夫 『フランス・ルネサンス断章』

日夏孝之助訳 『ポオ詩集』

深瀬基寛 『エリオット』

『ハックルベリー・フィンの冒険』を中村為治訳で読んだ時の年齢は九歳、原書で読んだのは高校二年生、『フランス・ルネサンス断章』と『ポオ詩集』も高校二年生、東京大学に入学した年に読んだのが『エリオット』。そして、処女作の『奇妙な仕事』が東大新聞五月祭号に載り、以後ずっと小説を書き続けて五十年が過ぎた。

四冊の本のなかには日本文学のものもふくまれていない。『ハックルベリー・フィンの冒険』は少年向けの冒険小説として簡訳されたものではなく、岩波文庫版の完訳である。



読む人間

映画文学人生論

主人公のハックは、ジムという黒人の青年とミシシッピ川を流れ下る旅をする。当時のアメリカ南部諸州では奴隷は主人の財産だったが、ジムは逃亡奴隷だ。人の財産を盗むことに加担した人間は地獄に行くことと教えられていたハックだが、ジムへの友情から密告をしないことに決めた。「ぢゃあ、よろしい、僕は地獄へ行こう」。

地獄へ行ってもいいから、ジムを裏切るまいと考えた——大江健三郎少年が影響を受けたのはその一行だという。自分もそうしようと思った。

高校に進学すると、世界文学全集を読むようになる。そのなかにダンテの『神曲』があった。地獄篇、煉獄篇、天国篇の三部作からなる長編叙事詩だ。キリスト教になじみにくい日本人にとっては難解な文学だが、あえて挑戦する。

その後、四十八歳から五十歳までの三年間、再挑戦した。大江の小説『懐かしい年への手紙』には、ギー兄さんという『神曲』を読む人物が登場している。「僕は地獄へ行こう」というハックへ共感した四国の谷間の少年が成長してギー兄さんのように地獄の読書家になった。

大江にならって、ダンテ、ウイリアム・ブレイク、マルカム・ラウリー、エドワード・サイードなども読まなければと、強迫観念にとりつかれ、読書地獄の亡者になったような気がしてくる。

われ世路を失ひ、人生の覇旅半にあたりて
とある暗き林ののなかにありき

神曲